

蘆刈

禪竹作

ワキ 妻の従者

狂言 里人

ツレ 左衛門の妻

シテ 日下左衛門

地は 摂津

季は 春

「古き都の道なれや。く。難波の浦を尋ねん。

「かやうに候ふ者は。都さる御方に仕へ申す者にて候。又是に御座候ふ御事は。頼み奉り候ふ人の若子の御乳の人にて御座候。御里は津の国日下の里にて候ふが。今一度御下りありたき由仰せ候ふ程に。此度我等御供申し。淀より舟にのせ申し。唯今難波の浦へと急ぎ候。

「淀舟や。水野の原の曙に。く。影も残りて有明

の。山本かすむ水無瀬川。渚の森をよそに見て。なほ行末は渡辺や。大江の岸もうつり行く。浪も入江の里つゞく。難波の浦に着きにけり。く。

「御急ぎ候ふ程に。是は、や津の国日下の里に御着きにて候。是に暫く御待ち候へ。日下の左衛門殿を尋ね申さうずるにて候。此あたりの人の渡り候ふか。

「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ「此あたりに日下の左衛門殿と申す人の渡り候ふか。

狂言「もとは此所に御座候ひしが。散々御無力にて今は此所には御座なく候。

ワキ「あら何ともなや候。此由をやがて申さうずるにて候。如何に申し候。左衛門殿を尋ね申して候へば。今は此所には御座なき由申し候。

ツレ女サシ「げにや家貧にしては親知すくなく。賤しき身には

故人うとしとかや申すなれば。身には限らぬ習ひなれども。余りにあさましき有様かな。去りながら様々ちぎり置きし事有り。此所に暫く逗留し。彼人の行方を尋ねばやと思ひ候。

ワキ「げにく仰せ尤にて候。此所に暫く御逗留候へ。猶々御行方を委しく尋ね申さうずるにて候。いかに以前の人の渡り候ふか。此浦に如何なる面白き事は候はぬか。都の人に見せ申したく候ふよ。

狂言

「さん候この浦に浜市の候。色々の物を売り買ひ候ふ中に。若き男の此難波の蘆を刈りて売り候ふが。色々に戯れごとを申して面白き者にて候ふ間。名草の事にて候ふ程に皆々買ひ取り候。暫く御待ち候ひて彼者を御覧候へ。

ワキ

「あらうれしや候。さらば彼者を待つて見うずるにて候。

シテサシ

「足引の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路湯。

げにや所から異浦々の気色までも。ながめにつゞく難波舟の。出で浮びたる朝ぼらけ。心も澄める面白さよ。

一声

「難波なる。見つとはいはじかゝる身に。

地

「我だに知らぬ面わすれ。

シテ

「立ち舞ふ市の中々に。

地

「隠れどころはある物を。

シテサシ

「げに受けがたき人界を。たま／＼受くる身なりせ

ば。栄花の家には住みもせで。かゝる貧家に生るゝ
事。前の世の戒行こそ拙けれ。今とても為す業も
なき身の行方。昨日と過ぎ今日と暮れ。明日又
かくこそ荒磯海の。浜の真砂の数ならぬ。此身命
をつがんとて。あだなる露の草の葉に。蘆刈人と
為りたるなり。

下歌
「何とかならん難波江の。浦に出で里に雪の。寒き
日をも厭はず。」

上歌
「しほたるゝ。我身のかたはつれなくて。く。異
浦見れば夕煙。うらめしや終に身を。立てかねて
こそ賤しけれ。蘆田鶴の。雲井のよそに詠めこし。
月の下蘆刈り持ちて。露をも運ぶ袖の上。猶あり
がほの心かな。く。」

ワキ詞
「いかに是なる人に申すべき事の候。
シテ詞
「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。」

ワキ
「見申せば色々の物を売り候ふ中に。難波の蘆を御

売り候ふ事やさしうこそ候へ。

シテ「さん候此あたりにては売る者も買ふ人も。唯何となくあつかふ所に。都の人とて難波の蘆を御賞翫こそ。返すぐもやさしけれ。我も昔は難波津の名におふ古き都人の。縁の露のおちふれたる。身は枯蘆の色なくとも。よしとて召され候へ。

ワキ「あら面白や候。さてよしと蘆とは同じ草にて候ふか。

シテ「さん候譬へば薄ともいひ。穂に出でぬれば尾花ともいへるが如し。

ワキ「さては物の名も所によりて変はるよなふ。

シテ詞「中々の事此蘆を。伊勢人は浜荻といひ。

ワキ「難波人は。

シテ「蘆と云ふ。

詞「むつかしや。難波の浦のよしあしも。く。賤しき海士はえぞ知らぬ。唯世をわたる為めなれば。

仮の命つがんとて。蘆を取り運びて。此市にいつる蘆数に。おあし添へて召されよや。おあし添へて召されよ。露ながら。難波の蘆を刈り持ちて。よるは月をも運ぶなりや。暇をし夕汐の。昼の内に召されよや。昼の内に召されよ。

ワキ詞

「如何に申し候。さて御津の浜とは何くにて候ふぞ。

シテ

「忝くも御津の浜の御在所はあれにて候。

ワキ

「不思議やな何とて忝きなどゝは仰せ候ふぞ。

シテ

「あら何ともなや。さらば何とて御津の浜とは御尋ね候ふぞ。忝くも仁徳天皇。此難波の浦に大宮づくりし給ふ。御津と書いて御津の浜とは申すなり。

ワキ

「げに面白き謂かな。皇居なりつる浦なれば。御津の浜とは理なり。

シテ

「波濤海辺の大宮なれば。漁村に灯す篝火までも。禁裏雲井の御火かと見えて。上雲上の月卿より。下万民の民間までも。有難かりし恵ぞかし。や。

あれ御覧ぜよ御津の浜に。網子とゝのふる網船の。
えいやくと寄せ来るぞや。

地

「名にし負ふ難波津の。く。歌にも大宮の。内ま
で聞ゆ網引すと。網子とゝのふる。海士の呼声と
よみおける。古歌をも引く網の。目の前に見えた
る有様。あれ御覧ぜよや人々。

シテ

「面白や心あらん。

地

「面白や心あらん。人に見せばや津の国の。難波わ

たりの春のけしき。おぼろ舟こがれ来る。沖の鷗
磯千鳥。つれだちて友よぶや。海士の小舟なるら
ん。

シテ

「雨に着る。

地

「雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も真管の。
笠はなどか無からん。

ロンギ地

「難波津の春なれや。

シテ

「名におふ梅の花笠。

地 「縫ふてふ鳥の翼には。

シテ 「鵲も有明の。

地 「月の笠に袖さすは。

シテ 「天つ乙女の絹笠。

地 「それは乙女。

シテ 「是はまた。

地 「難波女の。く。かづく袖笠ひぢ笠の。雨の蘆辺
も乱るゝかたを波。あなたへざらり。こなたへざ

らり。ざらりくざらくざつと。風のあげたる
古簾。つれぐもなき心おもしろや。

ツレ詞 「いかに誰かある。

ワキ詞 「御前に候。

ツレ 「あの蘆売る人に。其蘆一本持ちて来れと申し候へ。

ワキ 「畏つて候。いかに申し候。あのお輿の内へ。其蘆
一本持ちて御参りあれと仰せ候。

シテ 「畏つて候。さらば此蘆を参らせられ候へ。

ワキ「いや唯直に参らせ候へ。あら不思議や。今の蘆売
る男の。御姿を見参らせ。是なる所へ隠れて候ふ
は。何と申したる御事にて候ふぞ。

ツレ「今は何をか包み参らせ候ふべき。唯今の蘆売る人
は。わらはが古人にて候。是は夢かやあらあさま
しや候。

ワキ「言語道断の御事。更に苦しからぬ事にて候。某や
がて参り御供申し候ふべし。御心やすく思し召さ

れ候へ。

ツレ「いや暫く。皆々御出であれば。定めて恥ぢ参らせ
られ候ふべし。わらはひそかに行き。斯くと申さ
ばやと思ひ候。

ワキ「げに是は尤にて候。さらば御出であらうずるにて
候。

ツレ「如何にいにしへ人。わらはこそ是まで参りて候へ。
行末かけし玉の緒の。むすぶ契りのかひありて。

今は世にある様なれば。はるぐ尋ね参りたるに。
何くへ忍ばせ給ふらん。とくとく出でさせ給ひ候
へ。

シテ「是は唯夢にぞあるらん現ならば。よその人目も如
何ならんと。思ひ沈めるばかりなり。

ツレ「かくは思へど若は又。人の心は白露の。起き別れ
にしきぬぐの。妻や重ねし難波人。

シテ「蘆火たく屋は煤垂れて。おのが妻衣それならで。

又は誰にか馴衣。君なくて悪しかりけりと思ふに
ぞ。いとゞ難波の浦は住みうき。

ツレ「あしからじよからんとてぞ別れにし。何か難波の
浦は住みうき。

シテ「げにや難波津浅香山の。道は夫婦の媒なれば。

地「さのみは何をか包井の。隠れて住める小屋の戸を。
押しあけて出でながら。面なのわが姿や。三年の
過ぎしは夢なれや。現にあふの松原かや。木陰に

円居して。難波の昔かたらん。

ワキ詞

「かゝるめでたき御事こそ候はね。やがて都へ御供あらうずるにて候。先々烏帽子直垂をめされ候へ。

地クリ

「夫れ高き山深き海。妹背恋路の跡ながら。ことに難波の海山の。所からなる情とかや。

シテサシ

「あるは男山の昔を思ひいでゝ。

地

「女郎花の一時をくねると云へども。いひ慰むる言の葉の。露もたわゝに秋萩の。本の契の消えかへ

り。つれなかりける命かな。

シテ

「さればかほどに衰へて。

地

「身を羽束師の森なれども。言葉の花こそ便なれ。

クセ

「難波津に。さくやこの花冬ごもり。今は春べと咲くや。この花と栄え給ひける。仁徳天皇と。聞えさせ給ひしは。難波の御子の御事。又浅香山の言の葉は。采女の盃とりあへぬ。恨みをのべし故とかや。此二歌は今までの。歌の父母なる故に。代々

にあまねき花色の。言の葉草の種とりて。我等如きの。手習ふ初めなるべし。然れば目に見えぬ。

鬼神をもやはらげ。武士の心なぐさむる。夫婦の情知る事も。今身の上に知られたり。

シテ
「津の国の。難波の春は夢なれや。」

地
「蘆の枯葉に風渡る。波の立居のひまとても。浅かるべしやわたづみの。浜の真砂はよみ尽くし。尽くすとも。此道は尽きせめや。唯もてあそべ名に

しおふ。何はの恨みうち忘れて。有りし契りに歸りあふ。縁こそ嬉しかりけれ。

ワキ詞
「いかに申し候。めでたう一さし御舞ひ候へ。」

シテ
「さらばそと舞はうずるにて候。今は恨みも波の上。

地
「立ちまふ袖のかざしかな。 (男舞)

地
「浮寐忘るゝ難波江の。く。蘆の若葉を越ゆる白浪。月も残り。花も盛に津の国の。小屋の住居の冬ごもり。今は春べと都の空に。伴なひ行くや大

伴の。御津の浦わの見つゝを契りに。 帰る事こそ
嬉しけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著